

---

# ひぐらのなく頃に...変動編

叶音\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ひぐらのなく頃に…変動編

### 【Nコード】

N4920Y

### 【作者名】

叶音\*

### 【あらすじ】

鷹野に敗北し、同じ世界を繰り返す事になった古手梨花。

昭和58年の雛見沢は、いつも通りかと思われた。

しかし！

「トラップの名人が富竹？」

「口先の魔術師が魅音？」

「美人双子が北条兄妹？」

「かぁいい物好きが知恵？」

「私の宿敵がレナ！？」

この難見沢、なんか変です。

## 日常く変常

「また：やり直し。」

鷹野に敗北し、新しい雛見沢で目覚めた。

どうやっても打ち破れない惨劇に、私は疲れ果てていた。

どうせ昭和58年の6月は、いつも通りの異常気象である。

私、古手梨花は重いランドセルを背負い、学校へと向かっていた。  
見慣れ過ぎた学校。

走り回る生徒。

いずれは消えてしまう、小さすぎる存在だ。

廊下を歩き、入り乱れる子供達と共に教室へ入ろうとした。

その時である。

隣を、見覚えのある人物が走り抜けていった。

富竹だ。

しかし、いつもの富竹と違う。

小さすぎるのだ。

私と同じぐらいの身長で、ランドセルを振り回している。

何より、どうして沙都子の制服を着ているのだろう。

私が富竹を凝視していると、気が付いたのかこっちに近づいてこよう  
言った。

「あつ：梨花ちゃん、遅いじゃないか。まったく、そんなのじゃ小  
学生はやっていけないぞ？ちなみに、今日の晩御飯はハヤシライス  
にするから、学校が終わったら一緒に興宮に行こう。」

「：は？」

私は状況を把握出来ないまま、自分の席に着いた。

すると、教室の扉から悲鳴が聞こえた。

「うわあっー!？」

何事かと思い、私は悲鳴が聞こえた扉に駆け寄った。

「あいたた：富竹、今日のトラップはキツくない？おじさん、肘擦

りむいちゃったよ……。」

「魅音! ……じゃなくて圭一? ……いや、魅音?」

目の前にいたのは、圭一の格好をした魅音だった。

「あははっ、引っかかったね! 保健室で己の未熟さを思い知るんだあ!」

分かった事が1つだけあった。

この雛見沢は、おかしい。

## 理性く現実

「一体どうなってるのよ……。」

思わず倒れかけた時、誰かが私の身体を支えてくれた。

振り向くと、そこには青いセーラー服を着た知恵がいた。

「あらあら古手さん、昨日はちゃんと寝ましたか？」

「梨花、大丈夫ですか？」

「保健室に行く？」

新たに現れたのは、園崎姉妹の服装をした北条兄妹だった。

沙都子は魅音の服を着ており、悟史は詩音の服を着ていた。

「い、いや……大丈夫なのですよ。あはっ、あははあ……。」

私が上手く笑えずにいると、後ろの方から滑るような音がした。

「クスクス……なんとか間に合ったようね。スライディングは偉大だ

わ……クスッ。」

私は振り返るのを拒んだ。

おそらく、鷹野が悟史の服装でスライディングして来たのだろう。

溜息をつきながら机に向かい、ふと教卓を見た。

そこには、知恵がいた。

正しくは、知恵の服を着た大石がいた。

「んっふっふ。皆さん、席に着いて下さいねえ。」

私はア然としていただろう。

ワンピース姿の富竹。

シャツにズボンの魅音。

セーラー服を着た知恵。

ロンスカの沙都子。

ミニスカの悟史。

スライディングをする鷹野。

そして、カレーよりも麻雀を愛する教師の大石。

なんじゃこりゃ。

「ねえ羽入！羽入！！」

「あうあう…梨花、この雛見沢はおかしいのです。」

「それは分かっているわよ！」

「お、怒らないでほしいのです…。あれ？そういえば、レナとか詩音とかがいないのです。」

「あら？…そういえばそうね。圭一と鷹野もいないわね。」

「んふふ、古手さん、独り言が大きいですよ？」

「あっ！？…ごめんなさいなのです。」

私は机を見つめ、圭一達を探すことにしたのだった。

## 夢幻く無限

朝からとんでもない目に遭ってしまった。

このままいくと、色々と厄介な事になってしまうだろう。

私は学校帰り、一人で入江の診療所へと向かった。

入江なら、何かを教えてくれるかもしれない。

病院に駆け込み、私を出迎えたのはレナだった。

ナース服のレナだ。

「ほう！かぁいいい梨花ちゃん、ご来店なんだよっ。だよっ。」

ちよつと違うぞレナ。

…と言うことは、レナは鷹野になっているのか。

この難見沢ではレナと戦う事になるのだろうか。

正直やりにくい。

入江はどうなっているのだろうか。

趣味からいって、おそらく圭一だと私は思った。

確認しなくては！

「レナ、僕はちよつと風邪気味なのですよ。コンコンなのです。」

「梨花ちゃん大丈夫？先生のところに行こうね。ほう！」

私の予想は違った。

レナに連れられ入った病室にいたのは、白衣を纏った詩音だった。

「あれー、梨花ちゃんまどうかしたんですか？」

「それがね、梨花ちゃん風邪気味なんだって。大変だよ！だよ！」

「ありやま…じゃ、診察しますからこちらの椅子にどうぞー。」

「み…みい、分かったのです…。」

詩音の診察は見事なもので、風邪を引いていないとバレてしまった。

しかし、季節の変わり目が危ないと言って何も怒りはしなかった。

「そついや、もうすぐ綿流しの時期ですね。」

そついうと、詩音は窓の方を見た。

「ほう、梨花ちゃんは儀式の練習を始める頃だよね？よね？」



「そういえば…そうなのです。練習しなくてはなのですよ。」

「大変ですねえ。梨花ちゃん、うがい薬を出しておきますね。」

私はうがい薬を抱え、診療所を出た。

あと見つけてないのは、圭一と入江だけになった。

その時である。

シャッター音と激しいフラッシュが、私を包み込んだ。

「み、みい…誰なのですか！」

「おっ、梨花ちゃんゴメンな。あまりにも梨花ちゃんが可愛くてさ。」

「圭一…!？」

目の前に現れたのは、富竹の格好をした圭一だった。

「え?うん、圭一だけど…。」

という事は、入江は大石なんだな。

まったく、困ったものだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4920y/>

---

ひぐらのなく頃に...変動編

2011年11月20日18時47分発行